

疱瘡踊り



郡山町から入来峠を越え、宮之城、紫尾山系を抜けて出水に至る国道328線は、幹線として交通量が相当多い。それが入来の麓地区に入ると昔ながらの玉石垣の通りで、おまけに道は昔の戦略上から直線になっていないので、制限速度も40キロ。走るほうもイライラするだろうが、住人にとっても切れ目なく走る車に横断するのは大変危険で、長年にわたって道路の拡幅かバイパスを通すかが争点になっていた。

一度壊せばもとは戻せない。この鄙びた中世の面影を残す街並みを大切にといい地権者の意識や識者の見識が遂に勝った。そして麓地区を巡る清色川沿いに、立派なバイパスが一年前にやっと完成した。

おかげで今はここを訪れる方々もゆつくり散策して頂ける。そのバイパスと麓地区を結ぶ三本の橋の掛け替えも行われることになり、先ず中心の山河橋（やまんこぼし）が完成した。渡り初めの式は平成十三年十二月十九日と決まった。十一月の下旬、「山河橋の渡り初めに疱瘡踊りの奉納をするため、練習があります」という回覧が回って来た。この麓地区には、何か大きなお祝いの行事のある時に奉納される「疱瘡踊り」という女性の踊りがあり、県の無形文化財にも指定されているという。私達夫婦が鹿兒島に戻ってから八年間に二回開催されたようだが、私は未だ見たことはなかった。

この平成十三年の鹿兒島市の「おはら祭」には、早稲田大学の奥島総長がわざわざ来鹿して参加なさるといふことで、鹿兒島稲門会の「連」が出来ることになった。松元会長には日頃新能でお世話になっていること、私達夫婦は勇躍参加することにした。十月になって、夜駅前ダイエーの上の階で何回

もの踊りの練習が開かれた。入来から市内は遠いが、さりとして人前でマゴマゴしている訳にもいかない。二人で初めと終わりの二回参加して、「おはら節」と「はんや節」を教わった。私は何とか会得出来たものの、夫はなかなか様にならない。特に「はんや節」はテンポが早く、前の人の足ばかり見ている夫は、まるでクラゲのダンスといった按配である。そこで祭の前の二三日、我が家の座敷で、これで完璧と思つまで自主特訓をびっしり行つた。

ところが皮肉にも当日は朝から雨、全面中止である。当日に開催された総会の後に会場で輪になって踊るには踊つたが、結局お揃いの浴衣も半纏も袖を通さず仕舞に終わった。そんな残念なことの後である。私は今度は「疱瘡踊り」に挑戦しようとして夜公民館に出掛けた。袂のある羽織を持つて来るようにとのことで、娘時代の丈が腰の下までもある、牡丹色の地に花柄の描かれたものをフリキ箱から引つ張りだして手提げに入れて行つた。

ここには「疱瘡踊り保存会」というのが結成されていて、町のあちこちの会の役員をしている顔なじみの男性たち三人が役員ということで、ストーヴを焚いて待つていた。

集まつていた十五人ほどの奥さんは、もつべテラの方々がかりらしい。踊り手が少なくなったという嘆きを聞くわりには、新人を指導するシステムなど何もないようで、新顔の私はどうも歓迎されるムードでもないらしかつた。その場での話合いで、十二月に入つてから二週間、六回の練習日が決まつた。その後テープの伴奏で、座敷一杯に広がつて踊りの練習をやつた。私も羽織を着て皆さんの後ろから真似をしようとしたのだが、これは「おはら祭」の踊りの様にはとてもいかなことが分かつた。振り付けが複雑なので単に見よう見まねでは踊れない。続いている練習のときは観察に廻つて、よく見ると全体は五つのフレーズから成り立っていて、一つのフレーズを三三回繰り返しては次のフレーズに移る。

手のしぐさが細やかだが全体として自分の位置は半歩の範囲を出ないというしとやかな舞であつた。

「踊ります」と申し込んであつたのに、積極的に指導して下さる方は一人もない。と言ってそこで引込んでしまわないところが私の私たるところなのであります。

第一回の練習日までに十日ほどある。私は近所の遠縁の先輩に頼み込んで、夜三回程家に来てもらった。基本の五通りのフリーズを教えてもらつてノートに書き止めた。伴奏のテープもダビングして踊つてみた。しかし運動神経の鈍さは自他ともに認めるところの私のこと、すんなり踊れる訳はなかつた。

郷土館に「示現流剣術」や「神舞」などとともに「抱瘡踊り」の記録ビデオがあることを思い出して、それをお借りしてダビングする。それから毎朝早起きして一人で何回もそれを見て細かいしぐさを覚えて、ビデオは逐一写してある訳ではなかつたし、映写の角度が後ろからのものでは手の形が全く分

らない。それでも何とか一通りは踊れる自信がついた。仕上げに「清流歌会」の先輩で、かつて踊りの先頭の御幣を持つて舞う大役をしていらした祁答院ミサチ女史の家にお邪魔して細部やコツを教えて頂いた。

第一回目の練習日が来た。私はなに食わぬ顔で仲間に入って踊つた。しかし皆が陰で特訓していることを知っていたのだから誰もびつくりした顔をしなかつた。

五回目の練習は、橋も完成していたので夜現場でこっそり行つた。踊り手は今回は十三人、太鼓を打つ人、その太鼓を手で持つ人、三味線を弾く人いずれも二人ずつ、全て女性で総勢十九人。行進の練習もやつて、欄干の支柱の何番目で止まるかを決めた。前後、左右どのくらいの間隔で開くかなど、北風の寒い中であつたが結構楽しんでやつた。河川敷が広いので橋は長く、点々と和風の照明が灯つて、夜目にはどんな大河が流れているのかと思つほどで

あつた。

疱瘡踊りの大変なことは、夫人の第一級の正装である留袖を着なければならぬことである。私も前夜は長襦袢の襟を付け替えたり小物を揃えたりと、子供の結婚式以来の準備をして床に着いた。

当日は十一時から出番ということで、九時に公民館に集合。麓出身の美容院の先生が店員さんと大わらわで着付けのサービスである私は母より伝来の祖母の丸帯を締めることにして、メリツといかないように慎重に締めてもらう。この帯は時代物ではあるが何処の結婚式場でも褒められて来た。入来では初めての留袖姿でもある。

紫の頭巾を被り、艶やかに着付けを終えて三々五々橋の袂に集合する。圧巻は太鼓さんの支度。帯は恰好よくふくら雀で、前の両襟は帯に挿んで、下は真っ赤な腰巻き。花嫁よろしくの化粧に黒漆の陣笠を被るのである。神主さんや役員、園児たちが折り返した後から、橋の前方で踊り、折り返して麓

近くでもつ一回踊る。カメラがご趣味なのでお知らせしておいた地球堂のご主人の顔も見えた。いよいよ本番。空は重く曇っていたが、時折は薄日も射してますますである。整列して御幣持ちを先頭に三列四段がしずしずと前進する。身長の高い私は最後の中央である。踊りは緊張しすぎて一寸間違えそうにもなったが、気づかれなかったようだ。終わって観客の人々から上手だったと褒められて、私の得意の鼻はピノキオのそのようにニョキニョキと伸び、ピクピクし始めている。

以前は麓の女性の踊りとしての格式を重んじたため、いろいろな摩擦もあったらしい。でも踊りは楽しくなくては無意味だし、魅力がなければ自然消滅するだけだ。別名「トンコチンチン」というこの踊りは、実際は楽しいものだ。これからはもっと開放的に明るく若い人達と楽しみながら踊りたいと思う。ウオッシュャブルな衣装も考案して。などと山北の日々もオツなものなのである。